

2 中高連携授業変革の歩み

(2) 岐阜県立可児高等学校における実践

< 授業実践 >

授業実践に向けての構え

- ・ 中学校の学習内容と関連付けるために、中学校3年間の学習内容を整理し、常に生徒の履修程度を確認しながら新しい文法事項を導入する。
- ・ 挙手や発言といった中学校時の積極的な授業態度を大切にし、「生徒が1分たりとも黙り込まない授業」を目指す。
- ・ 四技能の中でも特に「話す」「読む」といった声を出す時間を意識的に増やし、教師がゆっくりリズムカルに読むことによって、生徒が恥ずかしがらずに大きな声を出すことのできる雰囲気を作る。
- ・ 生徒が最新のニュースを自らの英語で発表し、その他の生徒がそれを聞き取って教師の英問に英答するという活動を年間を通して行い、英作文の力・人前で発表する力・聞き取る力を養う。社会情勢や諸外国の出来事にも目を向けて、それを英語で表現する習慣をつける。
- ・ クラスルームイングリッシュに心がけ、教師の発言の半分以上は英語とするよう工夫する。
- ・ 授業毎の予復習指導を徹底し、授業内容も予習を前提としたものとすることによって、英語だけでなく今後いかなる言語を習得する場合でも通用するような学習姿勢を育成する。

第1回授業交流研究会

【日時】 平成14年11月21日(木)

【公開授業】

- ・ 単元名 Progressive English Course II Lesson 11 "The Value of Science"
- ・ 授業学校・学年 岐阜県立可児高等学校 2年
- ・ 主な提案内容

文科系の習熟度クラスで、生徒の能力は非常に高い。教科書の内容だけでなく、生徒の知的好奇心を刺激するような授業を展開することが当初からの目標である。この授業交流研究会をきっかけに、今後の英語学習にさらに弾みがつくように、その時だけのワンショットの授業ではなく、具体的な授業内容や前後の指導もなるべく普段通りであるように心がけた。

【授業研究会】

参観された中学校の先生方からは以下のようなご意見をいただいた。

- ・ 「読む」「書く」「話す」「聴く」という四技能がバランスよく取り入れられた授業であった。
- ・ 習熟度の高い生徒集団であるので、今後ディベートなどの活動を取り入れていくとよいのではないかと。
- ・ 授業内容が非常に高度で、英語好きな生徒には大変勉強になり、英語に対する興味関心を引き出すことができる。
- ・ 地道な予習指導で、ほぼ全員の生徒が予習をして授業に臨んでいた。
- ・ 非常にアットホームな雰囲気の中で、生徒が自由にのびのびと自分の意見を発表していた。グループワークも良好で、生徒は楽しそうに意見交換をしていた。

第2回授業交流研究会

【日時】 平成15年1月21日(火)

【公開授業】

- ・ 単元名 長文と文・作・語法の20章 Lesson 1 ~ Lesson 5 の復習
- ・ 授業学校・学年 岐阜県立可児高等学校 2年
- ・ 主な提案内容

第1回授業交流研究会の際に行ったような授業を積み重ねた後に、定期的に行ってきた復習活動を見ていただくことにした。レッスン5課分なので、生徒にとってはかなりの量を一気に復習することになるが、逐語訳や細かい文法事項といった「木を見て森を見ない」学習方法に陥る傾向があるので、文章全体の流れを掴んで筆者の意図を大まかに捉えたり、その文章を読んだことによって題材に興味をもち、その後自らの力で情報収集して学習を進めるといった、いわゆる自己学習力を育成するきっかけになるように心がける。

【授業研究会】

参観された中学校の先生方からは以下のようなご意見をいただいた。

- ・ 前回同様、4技能と共に多くの要素が取り入れられていた。
- ・ 聞き取りの能力を高めるのにふさわしい活動で、教員は1回しか英語を言わないが、すばやく生徒は反応していた。
- ・ 教科書から離れて一般教養で答えるような質問も含まれていたため、生徒はより集中して英語を聴くことができた。内容も、生徒が思わず答えたくなるような生徒の知的好奇心を刺激するものであった。
- ・ 生徒間の人間関係をよりよくするような活動であった。
- ・ 今後は生徒が、英語の単語ではなく文章で答えることができるように指導していくべきである。
- ・ 今回のような音声指導を、もっと他の指導事項にも応用したらどうか。

<グローバル・スタンダードによる英語力診断>

【実施日時】 平成14年11月27日(水)

【実施学年】 岐阜県立可児高等学校 2年

【TOEFL-ITPの結果分析及びその活用、効果】

昨年度は79名、今年度は43名が受検した。1年から2年への文理選択やクラス替えの影響で、2年連続で受検した生徒は数名となった。本校では、以前より多くの生徒が理科系を選択する傾向があり、昨年度に本プランの好結果を甘受した生徒の多くが理科系を選択してしまった次第である。連続して受検した生徒の結果について考察すると、文法問題及び長文に対する処理能力の迅速化、リスニング問題に対する恐怖心の低下、長文読解能力の充実が挙げられる。

<イマージョン・プログラム>

【実施日時】 平成14年7月17日(水) 13時30分~15時30分

【対象生徒】 ESSクラブ所属の生徒及び英会話に興味のある生徒

【講師及び講義内容】

可児市在住の英会話講師アンドリュー・マーク・ジョーズ氏を招いて、氏の母国オーストラリアの地理・文化について英語で講義していただいた。

【プログラムの成果】

ESSクラブ員を中心に、本プラン初年度及び今年度の両方または片方の対象生徒の有志が集まっただけあり、生徒の様子は非常に活発で、講師からの評判も上々であった。授業以外のこのような機会は、英語に興味・関心のある生徒にとって非常に有意義であったようである。

【英語学習のソフトの充実】

コンピュータ室を生徒に開放し、昼休みや放課後に英会話や英語表現を自由に学習できる自学自習用ソフトを4種類購入した。管理面について若干の問題を残しているため現在は運用できていないが、来年度より是非活用していきたい。



< 成果と課題 >

2年間計3回にわたって中学校の実践を見せていただき、高等学校側は中学校での学習内容をもっと知るべきであることを改めて痛感した。中学校の指導の優れた点を学び、高校1年生が高等学校の学習の第一歩でつまづかないように配慮していきたい。具体的な課題点は、以下の通りである。

中学校では、生徒に定着させたい学習事項を、筆記だけではなくオーラルで繰り返し指導する。従来からの課題なので、今後も継続的に取り組んでいきたい。中学校では、自己評価を大きく取り入れている。来年度の「評価規準」導入に向けて、評価の問題は現在検討中である。今後各方面と十分な話し合いを持っていきたい。

中学校では、生徒の能力差が大きいため、授業内容はほぼ全員が理解できるものになっている。能力の高い生徒の知的好奇心を刺激するという意味合いで、難易度を考慮しながら、発展的な学習内容も含めて学習事項を検討していきたいと考えている。

中学校では、1つの単元にかかる時間に余裕があるため、さまざまな活動を展開することができる。そのため、プリントなどの補助教材が多く、その一つ一つが視覚に訴えるものである。時間的な制約はあるものの、中学校の素晴らしい部分を十分に吸収して、今後、本校における実践的なコミュニケーション能力の育成を目指した指導方法を確立していきたいと考えている。